

# 障害のある子どものきょうだいを育てる 保護者の悩み事・困り事に関する調査研究

阿部 美穂子・神名 昌子\*

## Research on worries and troubles of parents raising siblings of children with disabilities

Mihoko ABE & Masako KANNA

### 摘 要

本研究では、質問紙調査により、障害のある子どものきょうだいの子育てに対する保護者の悩み事・困り事の実態を調べ、家庭環境の要因が悩み事・困り事の有無に及ぼす違いを検討した。また、保護者が実践しているきょうだいへのかわりの内容を調べ、子育て上の問題に対する取り組みの現状と課題を考察した。その結果、約70%の保護者がきょうだいの子育てに悩み事・困り事を抱えており、その多くは行動面、心情面にあることが分かった。さらに、その問題はきょうだい関係のみならず、親子関係に関連して起きている可能性が示唆された。また、保護者は、きょうだいの子育て上の悩み事・困り事に対し、きょうだいとのコミュニケーションなど、直接的なかわりにより解決や予防への努力をしているが、解決には、保護者自身への周囲からのインフォーマルなサポートが役立っていることも分かった。以上のことから、きょうだいの子育て支援にあたっては、きょうだい自身のみならず、親子関係にも焦点をあて、親子のかわり方を支援するとともに、家族全体を視野に入れたサポート体制を作る重要性が示唆された。

**キーワード：**障害児のきょうだい 子育ての問題 親子関係

**keywords：**Siblings of children with disabilities, Parenting Issues, Parent-child relationship

## I はじめに

障害のある子ども（以下、同胞）自身の問題に比べ、その兄弟姉妹（以下、きょうだい）が抱える問題については、近年、研究の途についたばかりである。特にきょうだいの心理的特徴については、アダルト・チルドレンモデルと関連付けて、年齢相応以上の役割分担や優等生化などの課題（Siegel & Silverstein, 1994）や、自己評価と自尊感情の低さ（吉川, 2001）などが指摘されてきたところである。このような同胞とともに育つことによって発生するきょうだいの成長上の問題は、きょうだい自身にとっての課題であると同時に、保護者にとっての子育て上の課題としてとらえることができるであろう。

西村ら（1996）は、きょうだいを育てる母親の問題として、①自分の受けている負担を子どもも同じように受けているのではないかという母親自身の不安、②子どもを平等に育てたいと思いながらもそうできない母親自身のきょうだいたちに対する申し

訳なさがあると指摘している。また、立山ら（2003）は、母親がきょうだいを養育する上での行ってきた配慮事項を調べ、母親が同胞ときょうだいを平等に扱うように配慮していても、どうしても同胞の方に注意が向いてしまうこと、母親ときょうだいの考える平等の間にずれが生じやすいなどの難しさを伴うこともあると述べている。また、広川（2006）が障害児施設におけるきょうだい支援の実態についてアンケート調査を行ったところ、その中で84.4%の職員が、きょうだいに対する親のかわりに「問題を感じる」と答えた。その内訳は「年齢以上の役割を取らせている」、「我慢させすぎ」、「対応が厳しすぎる」、「放任気味である」、「期待過剰」、「甘やかし」、「過保護」などであった。さらに、施設職員がきょうだいのことで親から相談を受けることが多く、相談内容の内訳は、「発達上の問題」、「育児上の問題」、「学校・保育所などでの問題」、「不登校・不登園」などであった。一方、富安・松尾（2001）は、脳性まひ児者親の会の母親に対して、きょうだいの子育てについて抱えている心配事や不安等について質問紙調査を行った。その結果、母親

\*富山県立高志支援学校教諭

は、きょうだいに対して自由な時間を制限させている、我慢させている、相談にのってやれないなど、自分自身に対する不全感を抱えていることが分かった。

このように障害のある子どもを育てている保護者にとって、そのきょうだいを育てることは大きな課題となっていると考えられる。

それでは、きょうだいを育てている保護者は実際にどのような悩みや困り事を抱えているのであろうか。また、それらは、家族環境によってどのように異なるのであろうか。さらに、保護者は自らの悩みや困り事を解決するため、どのように対処しているのであろうか。

そこで、本研究では、質問紙調査により保護者のきょうだいに対する悩み事・困り事の実態を明らかにし、特に家族構成や年代等の家庭環境の要因によって、その悩み事・困り事の有無に差が見られるかを検討する。さらに、保護者が実践している、悩み事・困り事の防止や解決につながるきょうだいへのかかわりの内容を調べ、保護者のきょうだいの子育て上の問題に対する取り組みの現状と課題を明らかにするとともに、きょうだいの子育て支援のあり方を探ることを目的とする。

## Ⅱ 方 法、Ⅲ 結 果

### 1 調査対象

T 県内の特別支援学校11校に在籍する児童生徒のうち、小学生以上のきょうだいのいる家庭（きょうだいが複数の家庭は、いちばん年上、あるいは、障害のある子どものすぐ年下のきょうだいを対象とする）のきょうだい1名と保護者に対して実施した。質問紙の配布は、各特別支援学校に依頼し担任を通して保護者に配布してもらい、約一週間後をめどに回収した。

調査期間は2010年2月中旬から下旬であった。

### 2 質問紙について

#### 1) 保護者の属性に関すること

①年代 ②同胞の主障害 ③職業形態について記入を求めた。

#### 2) きょうだいに対する悩み事・困り事の有無とその対応に関すること

表1に示す通り5つの観点から質問した。ま

表1 きょうだいに対する悩み事・困り事の有無とその対応

1 きょうだいを育てる上での悩み事・困り事があるか（ある ない）	
2 悩み事・困り事はきょうだいのどんな面でみられたか	
身体面	①チック ②吃音 ③ぜんそく ④円形脱毛症 ⑤自家中毒 ⑥爪かみ ⑦過食 ⑧拒食 ⑨潔癖症 ⑩その他（ ）
行動面	①不登校・不登園 ②きょうだいげんか ③友人とのトラブル ④会話の減少 ⑤その他（ ）
心情面	①不公平感を訴える ②いつまでも親といたがる ③よく泣く ④その他（ ）
3 きょうだいに心配なことがあるとき、どのように対処しているか（きょうだいとのかかわり方・相談する相手）	
きょうだいと かかわる (複数回答)	①きょうだいとよく話す・話をよく聞く ②一緒にでかける ③ふたりだけの時間をもつ ④きょうだいの努力や達成をほめる ⑤障害のあるお子さんもきょうだいも、 平等に接する ⑥その他（ ）
相談する (複数回答)	(だれに) ①配偶者 ②自分の父母 ③自分の兄弟姉妹 ④配偶者の父母 ⑤友人(同じ障害のあるお子さんの母親) ⑥学校の先生 ⑦その他（ ）
4 きょうだいへのどんなかかわりが悩み事・困り事の防止または、解消につながるか（自由記述）	
5 きょうだいのために相談する機関や利用するサービスがあるか（複数回答）	
	①教育・療育機関への相談 ②障害のある子の訓練・通園時にきょう だいを預かってもらう ③保育所・学童保育の利用 ④その他（ ）

ず「質問1 きょうだいを育てる上での悩み事・困り事の有無」を尋ね「ある」と回答した者に対し、「質問2 悩み事・困り事はきょうだいのどんな面でみられたか」「質問3 きょうだいに心配なことがあるとき、どのように対処しているか」を尋ねた。また、「ない」と回答した者に対し、「質問4 きょうだいへのどんなかかわりが困り事・心配事の防止または、解消につながるか」を尋ねた。さらに、全員に対し、「質問5 きょうだいのために相談する機関や利用するサービスがある

か」を尋ねた。質問項目の設定にあたり「質問2 悩み事・困り事はきょうだいのどんな面でみられたか」の項目については、まず、立山(2003)が行った母親ときょうだい(11歳から21歳)20組40名への面接調査で、きょうだいの発達段階に何らかのサイン(身体症状、行動上の問題など)がみられたとされる記述から具体的項目を抽出した。同じく広川(2006)が行った障害児通園施設にて行った施設職員への調査で、きょうだいに対する相談内容の記述から具体的項目を抽出した。抽出した項目を、「身体面」「行動面」「心情面」にそれぞれ分類し、選択肢とした。分類にあたり、まず「身体面」の悩み事・困り事とは、きょうだい自身の身体にかかわる状況や行動・習慣について、保護者が気がかりな事項とした。また、「行動面」の悩み事・困り事とは、きょうだいが周囲とかかわる際の状況や行動について保護者が気がかりな事項とした。さらに「心情面」の悩み事・困り事とは、きょうだいが示す態度や行動について、保護者がきょうだいの望ましくない心情の表れとして解釈している気がかりな事項とした。「質問3 保護者の対処(きょうだいとのかわり方・相談相手)」の項目については西村(2004)がSiegel & Silverman(1994)に基づいて示した「母親ができるきょうだいへの働きかけ」11項目よりかわり方の例を抽出し、それを選択肢とした。回答方法は、項目1～3及び5については該当するものを全てを選択、あるいはその他に具体的に記入、項目4については自由記述で回答するよう求めた。

### 3 調査結果の集計及び分析方法

調査結果の分析にあたっては、質問紙の設問ごとに単純集計によって分析し、必要に応じてJava Script-STAR version 5.57jで統計的分析を行った。

### 4 きょうだい・保護者の情報について

回答のあった346の家庭において、回答したきょうだいの男女別割合は、男子147名(42%)、女子199名(52%)であった。

きょうだいの年代別割合は、小学校低学年(小低)45名(13%)、小学校高学年(小高)82名(24%)、中学校・高校(中・高)150名(43%)、大学・社会人(大・社)69名(20%)であった。

きょうだい間の位置は、兄85名(25%)、姉133名(38%)、弟61名(18%)、妹67名(19%)であった。

きょうだいと同胞との年齢差は、0～2歳違い129名(37%)、3～5歳違い164名(48%)、6歳～違い53名(15%)であった。

回答者の家族構成は、核家族200名(58%)、複合家族(祖父母など同居している)146名(42%)であった。

同胞の主障害別割合は、知的障害270名(78%)、肢体不自由45名(13%)、聴覚障害26名(8%)、視覚障害5名(1%)であった。(図1)

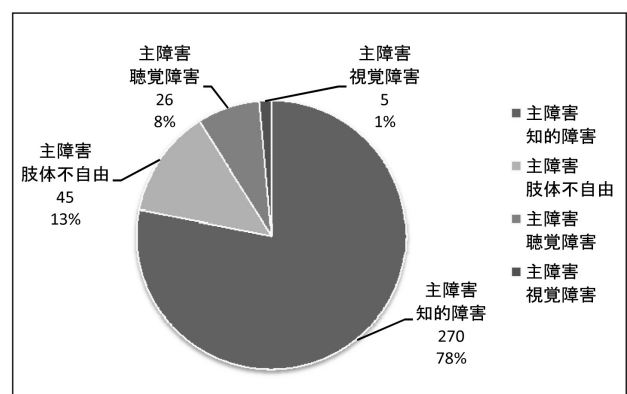


図1 同胞の主障害別割合

質問紙調査に回答した保護者の内訳は、父親21名(6%)、母親325名(94%)であった。

質問紙調査に回答した保護者の年代別割合は20代1名(1%未満)、30代75名(22%)、40代231名(67%)、50代39名(11%)であった。

質問紙調査に回答した保護者の職業形態別割合は常勤95名(27%)、パート145名(42%)、専業主婦106名(31%)であった。

### 5 保護者の悩み事・困り事について

1) 保護者の悩み事・困り事のある保護者となない保護者の比較

質問紙調査の回答者346名のうち、きょうだいに対して悩み事・困り事が「ある」と回答した保護者は245名(71%)、「ない」と回答した保護者は101名(29%)であった。直接確率法を用いて確認したところ、 $P<0.0001$ となり、悩み事・困り事の「ある」群が悩み事・困り事の「ない」群に比べ、有意に多かった。

2) 家庭環境による保護者の悩み事・困り事の有無

家庭環境（「きょうだいの男女別」「きょうだいの年代」「きょうだい間の位置」「家族構成」「きょうだいと同胞の年齢差」「保護者の年代」「保護者の職業形態」）の各要因について、 $\chi^2$  検定を用いて比較した（表 2～表 8）。

「きょうだいの男女別」「きょうだい間の位置」「家族構成」「保護者の年代」「保護者の職業形態」では、どの群にも保護者の悩み事・困り事の有無に有意差あるいは有意傾向がみられなかった。しかし、「きょうだいの年代」では、大学・社会人の群で、また、「きょうだいと同胞の年齢差」では、6 歳以上の群で 5 %水準で有意な差がみられ、いずれも悩みがない者が有意に多く、悩みのあるものが有意に少なかった。

表 2 きょうだいの性別と保護者の悩み事・困り事の有無のクロス表（単位 人）  $\chi^2 (1) = 0.000$  n.s.

		悩み事・困り事の有無		合計	
		悩みなし	悩みあり		
性別	男 子	度数	43	104	147
		期待度数	42.9	104.1	
		調整済み残差	.0	.0	
	女 子	度数	58	141	199
		期待度数	58.1	140.9	
		調整済み残差	.0	.0	
合 計		度 数	101	245	346

表 3 きょうだいの年代別と保護者の悩み事・困り事の有無のクロス表（単位 人）

$\chi^2 (3) = 9.036$   $p < .05$  ▲有意に多い, ▽有意に少ない

		悩み事・困り事の有無		合計	
		悩みなし	悩みあり		
年代別	小低学年	度数	10	35	45
		期待度数	13.1	31.9	
		調整済み残差	-1.1	1.1	
	小高学年	度数	20	62	82
		期待度数	23.9	58.1	
		調整済み残差	-1.1	1.1	
	中学・高校	度数	41	109	150
		期待度数	43.8	106.2	
		調整済み残差	-0.7	0.7	
	大学・社会人	度数	30▲	39▽	69
		期待度数	20.1	48.9	
		調整済み残差	2.9	-2.9	
合 計		度数	101	245	346

表 4 きょうだいの位置別と保護者の悩み事・困り事の有無クロス表（単位 人）  $\chi^2 (3) = 5.098$  n.s.

			悩み事・困り事の有無		合計
			悩みなし	悩みあり	
きょうだいの位置	兄	度数	31	54	85
		期待度数	24.8	60.2	
		調整済み残差	1.7	-1.7	
	姉	度数	41	92	133
		期待度数	38.8	94.2	
		調整済み残差	.5	-.5	
	弟	度数	13	48	61
		期待度数	17.8	43.2	
		調整済み残差	-1.5	1.5	
	妹	度数	16	51	67
		期待度数	19.6	47.4	
		調整済み残差	-1.1	1.1	
合 計		度 数	101	245	346

表 5 きょうだいの家族構成と保護者の悩み事・困り事の有無（単位 人）  $\chi^2 (1) = 0.325$  n.s.

		悩み事・困り事の有無		合計	
		悩みなし	悩みあり		
家族構成	核家族	度数	56	144	200
		期待度数	58.4	141.6	
		調整済み残差	-.6	.6	
	複合家族	度数	45	101	146
		期待度数	42.6	103.4	
		調整済み残差	.6	-.6	
合 計		度数	101	245	346

表 6 きょうだいの年齢差別と保護者の悩み事・困り事の有無クロス表（単位 人）

$\chi^2 (3) = 7.392$   $p < .05$  ▲有意に多い, ▽有意に少ない

			悩み事・困り事の有無		合計
			悩みなし	悩みあり	
年	0 ～ 2 歳 違い	度数	31	98	129
		期待度数	37.7	91.3	
		調整済み残差	-1.6	1.6	
齢	3 ～ 5 歳 違い	度数	47	118	165
		期待度数	48.2	116.8	
		調整済み残差	-3	.3	
差	6 歳以上 違い	度数	23▲	29▽	52
		期待度数	15.2	36.8	
		調整済み残差	2.6	-2.6	
合 計            度 数			101	245	346



表7 保護者の年代別と保護者の悩み事・困り事の  
有無クロス表 (単位 人)  $\chi^2(2)=0.885$  n.s.

			悩み事・困り事の有無		合計
			悩みなし	悩みあり	
保護者の年代	30代	度数	19	57	76
		期待度数	22.1	53.9	
		調整済み残差	-.9	.9	
	40代	度数	69	162	231
		期待度数	67.2	163.8	
		調整済み残差	.5	-.5	
	50代	度数	12	25	37
		期待度数	10.8	26.2	
		調整済み残差	.5	-.5	
合 計 度 数		100	244	344	

表8 保護者の職業形態別と保護者の悩み事・困り  
事の有無クロス表 (単位 人)  $\chi^2(2)=0.913$  n.s.

			悩み事・困り事の有無		合計
			悩みなし	悩みあり	
勤 務 形 態	常勤	度数	31	64	95
		期待度数	27.7	67.3	
		調整済み残差	.9	-.9	
	パート	度数	39	106	145
		期待度数	42.3	102.7	
		調整済み残差	-.8	.8	
	専業主婦	度数	31	75	106
		期待度数	30.9	75.1	
		調整済み残差	.0	.0	
合 計 度 数		101	245	346	

## 6 きょうだいの年代別にみる保護者の悩み事・ 困り事の内訳

きょうだいの年代ごとに悩み事・困り事のある保

護者の数を母数とした場合の身体面・行動面・心情面についての悩みが占める割合を示す (図2)。また、保護者のきょうだいに対する悩み事・困り事を身体面・行動面・心情面でそれぞれ比較した (図3 図4 図5)。

各項目における悩み事・困り事的具体事例として

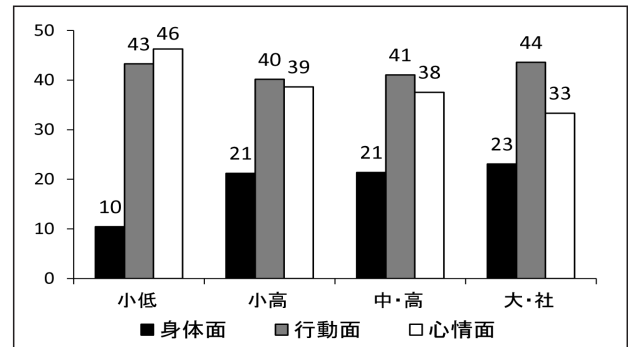


図2 きょうだいの年代別保護者の悩み事・困り事の内訳 (%)

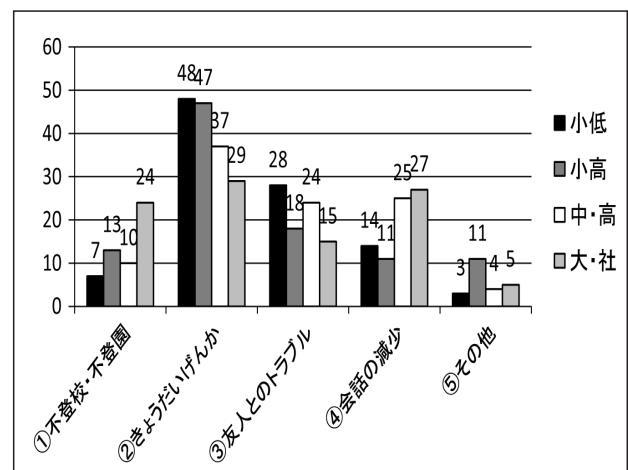


図4 きょうだいの年代別悩み事・困り事 (行動面) (%)

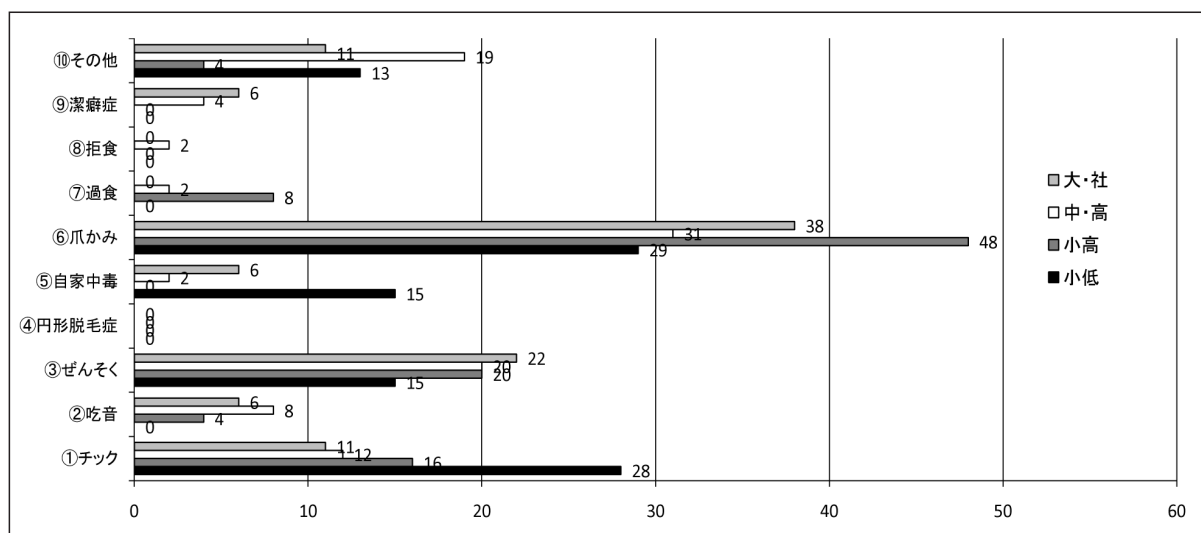


図3 きょうだいの年代別悩み事・困り事 (身体面) (%)

は、身体面では、どの年代も「爪かみ」が一番多く（小低29%小高48%中・高31%大・社38%）次いで小低で「チック」(28%)，小高，中・高，大・社で「ぜんそく」(20%，20%，22%)であった(図3)。

行動面では、どの年代も「きょうだいげんか」が一番多く（小低48%小高47%中・高37%大・社29%），次いで小低，小高で「友人とのトラブル」(28%，18%，24%)，及び中・高，大・社で「会話の減少」(25%，27%)であった(図4)。

心情面では、どの年代も「不公平感」が一番多く（小低61%小高58%中・高62%大・社38%），次いで「いつまでも親といたがる」(小低26%小高22%中・高12%大・社30%)であった(図5)。

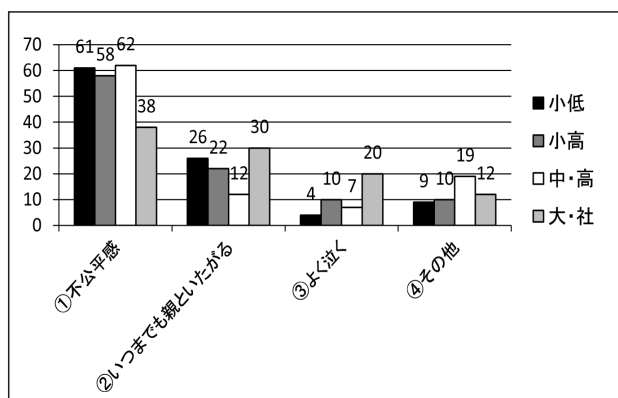


図5 きょうだいの年代別悩み事・困り事（心情面）（%）

また、保護者が身体面・行動面・心情面の「その他」の欄に自由に記入した内容をそれぞれ年代別に示す(表9 表10 表11)。本調査は、保護者の視点から、きょうだいの子育てについて感じている悩み事・困り事の実態を明らかにすることを目的としている。そこで、自由記述については、保護者が身体

表9 その他に記入された悩み事・困り事（身体面）

悩み事・困り事	年代
・他害 てんかん	小高
・病気	中・高
・病気の再発	
・指しゃぶり	
・自慰行為	
・夜尿	
・アトピー	
・肥満	
・不眠	
・生理不順	大・社
・入退院の繰り返し	

表10 その他に記入された悩み事・困り事（行動面）

悩み事・困り事	年代
・保護者と一緒に行動する時間が少ない	小低
・コミュニケーションがとれない	小高
・他害	
・いじめ	
・言葉が未だにでない	
・同胞に冷たい、怒る	
・習い事に行きにくい	
・差別する	
・落ち着きがない	中・高
・態度が悪い	
・言葉遣い、暴言・暴力、すぐキレる	
・会話が困難	
・友達関係を積極的に作ろうとしなかった学校で浮いている感じだった	
・いつまでも幼い	大・社
・遠慮している	

表11 その他に記入された悩み事・困り事（心情面）

悩み事・困り事年代	年代
・我慢している	小低
・同胞がなぜできないのか理解できない	
・心配しすぎる	
・同胞の世話を手伝えることを少しづらく感じている	
・弟のことで気を遣う	小高
・何かにつけ文句、怒鳴り散らす	
・きょうだい同士で遊ぶことができなくて、寂しそうだ	
・情緒不安定だ	
・怒りのやり場がなく、いらいらしている	
・気持ちが通じ合わない	
・同胞を仲間として認めない	中・高
・あまり感情を表さない	
・家に帰りがたらない	
・情緒不安定 すぐパニックになる	
・いつも後回しになり、同胞の世話を頼んでしまう	
・友達にいじめられたため、つきあい方に不安をもっている	
・虫や揺れるものをとても嫌がる	
・障害のある子どもの入院中、淋しい思いをさせた	
・同胞に障害があることをどのように理解させるか	
・表情が乏しくなった	
・不満があっても我慢している	
・年齢よりも考えが大人っぽい	大・社
・ストレスを感じている	
・不安定である	
・悲しい思いをしている	大・社
・親自身が心に余裕がなく、子どもにいらいらしてあたってしまうことがあった	

面、行動面、心情面として判断し、記入したものをそのままの分類とした。特に心情面には、きょうだいの態度や行動だけでなく、保護者のきょうだいに対する対応に関する記述が含まれているが、これは自らの対応の結果、きょうだいの心情面に何らかの望ましくない状況が生じている、あるいはこれから生じる可能性について、保護者が心配し悩んでいる事項と考えられた。

## 7 きょうだいに心配なことがあるときの対処方法（きょうだいとのかかわり方・相談する相手）

きょうだいに対する保護者のかかわり方の内訳は、きょうだいとよく話す・話をよく聞く155名（45%）、一緒に出かける107名（31%）、二人だけの時間をもつ117名（34%）、努力や達成を褒める125名（36%）、平等に接する117名（34%）であった。（複数回答あり）（図6）

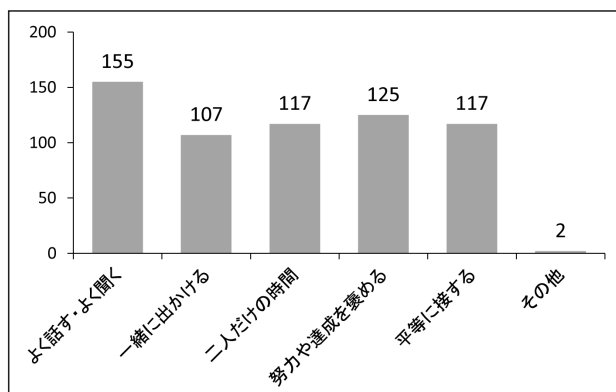


図6 きょうだいに対するかかわり方

保護者のきょうだいに対する悩み事・困り事の相談相手の内訳は、配偶者152名（44%）、自分の父母87名（25%）、自分の兄弟姉妹25名（7%）、配偶者の父母19名（5%）、友人（同じ障害のある子どもの母親）95名（26%）、学校の先生50名（13%）、その他13名（4%）であった。（複数回答あり）（図7）

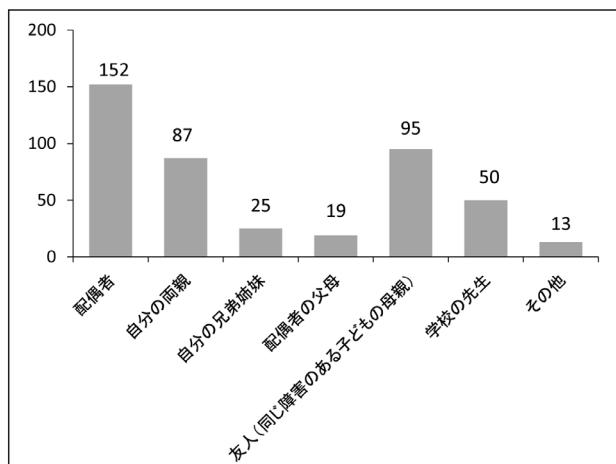


図7 保護者の相談相手

者の父母19名（6%）、友人（同じ障害のあるお母さん）95名（28%）、学校の先生50名（15%）であった。（複数回答あり）（図7）

## 8 きょうだいに対する悩み事・困り事の防止や解消につながる保護者のかかわり（自由記述の分析）

保護者の自由記述の内容をカテゴリーに分類した（表12）。分類は、筆者らと研究の主旨について説明を受けた他1名で協議し、最終的に全員が合意できた時点のカテゴリーを最終決定とした。

悩み事がある群とない群とで比較したところ、悩み事・困り事のあるなしにかかわらず、共通するカテゴリーAと、それぞれに特有なカテゴリーB、Cに分類された。カテゴリーBは悩み事・困り事のある群に特有なカテゴリー、カテゴリーCは悩み事・困り事のない群に特有なカテゴリーである。

表12 きょうだいに対する悩み事・困り事の防止や解消につながる保護者のかかわり（%）

	カテゴリー	悩み事あり群	悩み事なし群
A	きょうだいと話し、気持ちを分かってやる	36	34
	二人の時間をもつ、きょうだいを優先する	18	10
	平等に接する	14	26
	障害理解を促す	14	7
	親の思い(大切に思っていること)を伝える	14	2
B	相談機関の利用	5	0
C	配偶者・家族の協力・周囲への相談	0	10
	きょうだいが親の相談相手	0	5
	年齢差があり、悩まない	0	5
	きょうだいに頼りすぎない	0	2

## 9 きょうだいのために相談する機関や利用するサービス

きょうだいのために相談する機関や利用するサービスがあると回答した内容の内訳は、教育・療育機関への相談41名（12%）、障害のある子の訓練・通園時に預かってもらう29名（8%）、保育所・学童保育の利用55名（16%）、その他15名（4%）であった。（複数回答あり）（図8）

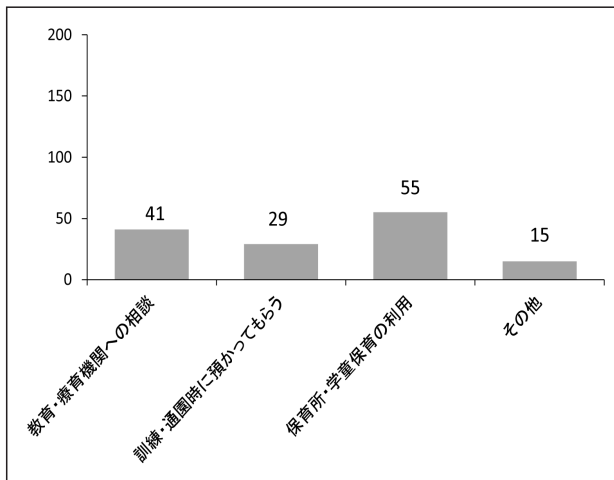


図8 きょうだいのために相談する機関や利用するサービス

#### IV 考 察

本調査研究では、保護者のきょうだいに対する悩み事・困り事の実態や悩み事・困り事の種類及び、保護者が実施しているその解決・防止方法について調べた。

その結果、きょうだいに対して悩み事・困り事が「ある」と答える保護者は、「ない」と答える保護者と比較し有意に多かった。このことは、きょうだいの子育てに関して保護者の悩み事に何らかの支援が必要であることを示している。先行研究ではきょうだいに対しての支援の必要性が示されているが、今回の研究から、きょうだいだけでなく、保護者支援に取り組む必要があることが明らかとなった。

また、悩み事・困り事の有無に影響を及ぼしている家庭環境要因として、きょうだいの年代と同胞との年齢差があることが分かった。特に、年代においては、大学生・社会人の群で、同胞との年齢差においては、6歳以上の群で、期待度数よりも悩み事・困り事のない人が多く、悩み事・困り事のある人が少なくなっていることから、年代では成人期を迎えると悩み事が解決されていることが示唆された。また年齢差が6歳以上とは、幼児期に同胞と一緒に過ごす機会が少ないことが考えられ、併せてきょうだいと同胞に対して保護者や周囲の者が個別にかかわる期間が長いことで、悩み事・困り事の発生が少なくなるのではないかとと思われる。この両者から、保護者のきょうだいの子育てにおける悩み事・困り事には、きょうだい自身の精神的な成長と、保護者がきょうだいと同胞に個別に子育てをした時間の長さ

が関係していると考えられる。

きょうだいに関する悩み事・困り事の内訳では、半数及びそれ以上に見られる問題から、少数に見られる問題まで多岐にわたっており、それぞれのきょうだいが個々に抱える問題の多様性が明らかとなった。しかしながら、傾向としては図2に見るように、どの年代も、身体面に比べ、行動面・心情面の悩み事が多くなっており、保護者が主としてきょうだいの行動面・心情面の問題への対応に苦慮していることが示唆された。さらに、図3の身体面の悩み事の内訳をみると、ストレスに関係していると考えられる項目が多く挙げられており、中でも「爪かみ」や「チェック」が高い割合を占めている。このことから、保護者の目には、きょうだいの心情面の問題が身体症状として表れている状況であり、きょうだいへの心理的な支援の必要性を強く感じているものと推察される。また、図5を見ると、心情面の悩み事・困り事では「不公平感」が最も多く、続いて「いつまでも親といたがる」「よく泣く」が挙げられている。これらは、保護者のきょうだいへのかわり方に関連すると考えられる。少数の保護者の記述にも、「きょうだいがいつも後回しになる」「コミュニケーションがとれない」というものがあり、きょうだいの子育てに関する保護者の悩み事・困り事には、きょうだいと同胞間の問題、きょうだい自身の問題だけでなく、保護者ときょうだいとの親子関係における問題が含まれていた。西村ら(1996)は、きょうだいたちには特有の問題があり、それは母親との関係の中で改善することができうるのではないかと述べているが、今回の調査から、保護者自身が自らのきょうだいに対するかわりが不適切、あるいは不十分であり、そのことが、きょうだいの育ちにおける悩み事や困り事を引き起こしている可能性があると考えられていることが示唆された。

一方、きょうだいに心配なことがあるときの対処方法では、図6にあるように、回答した約半数近くの保護者が、きょうだい本人とのコミュニケーションに努めており、きょうだいと二人だけの時間を確保するなど、きょうだい本人に向き合うため努力している保護者の姿が見える。また、きょうだいの子育てに関する保護者の相談相手は、お互いの配偶者が4割を占め、他の相談相手よりも高い割合となっている。富安・松尾(2001)の脳性まひ児の母親に対する調査でも、きょうだいの保育に関する相談



相手の1位に夫が挙げられており、保護者のきょうだいの子育てに関する夫婦間の協力体制の重要性が見て取れる。

きょうだいに対する悩み事・困り事の防止・解消につながるかかわりの自由記述内容は、表12に見るように、悩み事・困り事の有無にかかわらず共通しているカテゴリーAと、それぞれに特有なカテゴリーB・Cとがあり、両群の違いが明らかになった。共通しているカテゴリーAでは、きょうだいに心配なことがあるときの対処方法で挙げたように、きょうだいに個別にかかわる対応方法が取られているが、悩み事・困り事がある群では、ない群に比べ、「平等に接する」記述が少ない傾向である。また、「親の思い(大切に思っていること)を伝える」という、きょうだいに親自身を分かってもらおうとする働きかけがやや多い傾向になっている。このことから悩み事・困り事がある群の保護者が、きょうだい自身よりも、親側の立場に立った対応をしている傾向にあるのではないかと推測される。このことは、先に述べた親子関係の問題と関連するものであり、保護者のきょうだいへのかかわり方そのものへの支援の必要性を示すものであろう。また悩み事・困り事がある群は、B「相談機関の利用」を挙げ、外部機関に支援を求めるのに対し、悩み事のない群では、C「配偶者・家族の協力」「周囲に相談する」「きょうだい自身に相談する」など身近な家族に相談や支援を求めており、対照的である。悩み事・困り事のある群では、外部の相談機関を利用しているものの、「配偶者・家族の協力」「周囲に相談する」「きょうだい自身に相談する」記述は見られず、家族内でのコミュニケーションやサポート体制が不十分であることが推測される。このことは保護者にとって、配偶者・家族をはじめとして、身近な環境からのインフォーマルなサポートの存在が、きょうだいの子育てに関する悩み事・困り事の解決や防止につながる要因になっていることを示していると考えられる。このように、きょうだいの子育てにおいては、養育の中心となる保護者と身近な家族との支え合える充実した関係が、求められていると言える。

最後に、きょうだいのために利用する相談機関やサービス機関については、どの機関も利用率が低い状況となっている。障害のある子どものきょうだいを育てる保護者にとって子育てサポートサービスが、不十分、あるいは利用しづらい状況があるものと考

えられる。これまでのような障害のある子どもの子育てだけを対象とした支援体制ではなく、そのきょうだいの子育てを含め、広く家族支援の視点に立った支援体制整備が必要であると言える。

## V まとめ

本研究の調査の結果、約70%の保護者がきょうだいの子育てに悩み事・困り事を抱えていることが分かった。また、その内容はどの年代においても、身体面に比べ、行動面、心理面に関するものが多く挙げられた。具体的には、行動面では、どの年代も「きょうだいげんか」が一番多く、次いで「友人とのトラブル」及び「会話の減少」であり、心情面ではどの年代も「不公平感」が一番多く、次いで「いつまでも親といたがる」が多かった。また、身体面についても、「爪かみ」や「チック」など心情面での問題が関連する可能性が高い事項が多くなっており、保護者が主としてきょうだいの行動面・心情面の問題への対応に苦慮していることが示唆された。さらに、保護者はそれらの問題が、きょうだいと同胞との関係のみならず、保護者自身ときょうだいとの親子関係にも関連して起きているととらえている可能性が示唆された。このような認識に立って、保護者は、きょうだいの子育て上の悩み事・困り事に対し、きょうだいとのコミュニケーションをとるなど、直接かかわることにより、解決や予防への努力をしている。しかしながら、保護者のうち、悩み事・困り事がある群は、ない群に比べ、きょうだい自身よりも、親側の立場に立った対応をしている傾向にあることが推測され、保護者のきょうだいへのかかわり方そのものへの支援が必要であると考えられた。さらに、悩み事・困り事の解決には、保護者自身への周囲からのインフォーマルなサポートが役立っていることも分かった。

以上のことから、きょうだいの子育て支援にあたっては、きょうだい自身のみならず、親子関係にも焦点をあて、親子のかかわり方を支援するとともに、家族全体を視野に入れたサポート体制を作る重要性が示唆された。

## 謝 辞

本研究を実施するにあたり、T 県内特別支援学校の校長先生はじめ教職員の皆さま、保護者の皆さまに多大なご配慮とご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

## 文 献

- 広川律子(2006) 障害児通園施設におけるきょうだい支援の実態について. 障害者問題研究 第34巻 第2号, 154-159.
- 西村辨作・原 幸一(1996) 障害児のきょうだい達(1). 発達障害研究第18巻 第1号, 56-57.
- 西村辨作・原 幸一(1996) 障害児のきょうだい達(2). 発達障害研究第18巻 第2号, 150-157.
- 西村辨作(2004) 発達障害児・者のきょうだいの心理社会的な問題. 児童青年精神医学とその近接領域 45(4), 334-359.
- Siegel, B. and Silverstein, S. (1994) What about me? Growing up with a developmental disabled sibling, Plenum Press.
- 立山清美・立山順一・宮前珠子(2003) 障害児のきょうだいの成長過程に見られる気になる兆候-その原因と母親の「きょうだい」への配慮. 広島大学保健学ジャーナル Vol.3(1):37-45.
- 富安俊子・松尾寿子(2001) 障害児とそのきょうだいを育てている母親の体験調査. 母性衛生 第42号 第1号, 87-92.
- 吉川かおり(2001) 障害児の「きょうだい」が持つ当事者性-セルフヘルプ・グループの意義-. 東洋大学社会学部紀要 39(3), 105-118.

## 附 記

本研究は、平成22年度富山県高等教育振興財団助成事業採択、及び平成22年度富山大学人間発達科学部学部長裁量経費採択「障害のある子どものきょうだい児と、その親のためのいきいき子育て・親育ち応援事業」(研究代表：阿部美穂子)の基礎研究の一部として行われた。

(2011年5月20日受付)

(2011年7月20日受理)